語句
文法
内容理解

国語

1

次の文章を読み、あとの(1)～(7)の問いに答えよ。

1 碁を打つには相手がいる。野球を愉しむには自分の他に少なくとも十七人の賛同者が必要でしょう。そういう愉しみは、いつでもどこでも、というわけにはゆきません。道具や、設備や、場合によっては途方もなく広い場所がなければ、どうにもならない。読書の方は、設備も要らず、どこかへ出かけるにも及ばず、相手と相談もせず、気の向くままにいつでもどこでもできます。蛍の光窓の雪というのは、貧富の差が大きく、燈火用の油の値だんが高すぎたむかしの話です。今は電気がいたるところにあるので、誰でも、望めば昼となく夜となく好きな本を読むことができるでしょう。こんな便利な娯楽はめったにありません。

2 しかも当方(注1)の体力とはほとんど関係がない。老人子供、病人でも、多くの場合には、それぞれ読んで愉しめます。疲れているときでも、易しい疲れない本を選びさえすればよい。しかもカネがかからない。本が高くなったといっても、どこかの「ファミリー・レストラン」で二、三度食事をする値だんで、大抵の本は買えます。それでも買えないほど高い本は、公共図書館にあり、そこから借りればタダですむでしょう。こんなに安くて便利な愉しみを知らぬ人がいるとすれば、その気の毒な人に同情しなければなりません。

3 「オーディオ・ヴィジュアル」の情報が、活字情報を駆逐(注2)する時代が来た、という人がいます。「ヴィジュアル」とは視覚的ということで、たとえば肖像写真が一人の男または女の顔を示すのは、「ヴィジュアル」な情報です。しかしその他の誰ともちがう顔の特徴を言葉であらわすのは容易なことではありません。肖像写真は、活字何十ページ、いや、おそらく何百、何千ページに相当する情報を一挙に伝えることができます。しかしその男または女が、昨日はソバを食べた、明日はウドンを食べるだろう、という活字の一行に相当する情報を伝えることはできません。肖像写真は人物の顔の現在であって、過去も、未来も、表現できない。「ヴィジュアル」な情報と言葉による情報（その一つが活字情報）とは、互いに他を補うので、一方が他方を駆逐するのではないし、一方が他方に代るのでもありません。

4 言葉は耳で聞くこともできます。耳で聞くのが「オーディオ」。活字の文章は、声に出して読んでテープレコーダーに記録することができるでしょう。しかしそうすることが便利な場合と、不便な場合があります。活字の文章でなく音楽の記録ならば、あきらかにテープレコーダーが便利な道具です。六法全書(注3)をテープレコーダーに吹きこむのは、あまりに不便だから、誰もしないことです。要するに活字の時代の後に「オーディオ・ヴィジュアル」の時代が来たのではなく、活字情報に「オーディオ・ヴィジュアル」の情報が加わった、というだけのことです。どちらも愉しめばよいので、どちらか一方だけを選ぶ必要は全くありません。

5 それでは読書そのものに、どういう種類の愉しみが伴うでしょうか。それは人により、本によってちがうでしょう。もし共通の愉しみがあるとすれば、それは知的好奇心のほとんど無制限な満足ということになるかもしれません。どういう対象についても本は沢山あり、いもづる式に、一冊また一冊といくらでも多くのことを知ることができます。世の中には好奇心を刺戟する対象が数限りなくあるでしょうから、対象を移して、好奇心の満足を拡げてゆくこともできるでしょう。読書の愉しみは無限です。時間をもて余してすることがない、といっている人の心理ほどわかりにくいものはありません。人生は短く、面白そうな本は多し。一日に一冊読んでも年に三百六十五冊。そんなことを何十年もつづけることは不可能で、一生に一万冊読むのもむずかしいでしょう。

（加藤周一「読書術」による）

（注1）当方＝自分の方。こちら。
（注2）駆逐＝追い払うこと。
（注3）六法全書＝現行の主要な法令を収録した書物。

(1) 文章中の A賛同者 と熟語の構成（組み立て）が同じものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 好景気　イ 天地人　ウ 私有地　エ 未成年

(2) 文章中の B ない と同じ意味・用法のものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 私には関係がない話でした。
イ 気分を損ねないよう接する。

ウ　味気ない思いで帰宅した。
エ　あまり高価でない車が欲しい。

(3)　文章中に　[c]こんな便利な娯楽はめったにありません　とあるが、具体的にどのような点が便利なのか。1**段落のことば**を用いて、**二十字以上、二十五字以内**（句読点も字数に数える）で書け。

(4)　文章中に　[D]こんなに安くて便利な愉しみを知らぬ人　とあるが、同じような意味を表している語句を文章中から**二十三字**（句読点も字数に数える）で探し、**はじめ**と**終わり**の**五字**を抜き出して書け。

(5)　文章中に　[E]活字情報に「オーディオ・ヴィジュアル」の情報が加わった　とあるが、どのような意味か。最も適当なものを次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その記号を書け。

ア　活字情報が進化していく状況が、「オーディオ・ヴィジュアル」の情報の技術でさらに加速するということ。
イ　活字情報だけでは伝えきれない部分を、「オーディオ・ヴィジュアル」の情報によって補足するということ。
ウ　活字情報の時代が終わりを告げて、「オーディオ・ヴィジュアル」の情報が次の時代をになうということ。
エ　活字情報では予測できない未来のことを、「オーディオ・ヴィジュアル」の情報によって予測するということ。

(6)　文章中に　[F]知的好奇心のほとんど無制限な満足　とあるが、どのような意味か。最も適当なものを次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その記号を書け。

ア　好奇心を感じる相手を次々と変えていって、時間をもて余さないようにし続けるということ。
イ　好奇心の対象を順次変えることで、満足する心についての理解を深めるということ。
ウ　好奇心を得られる相手を増やし、まだ満足してない世界を減らしていくということ。
エ　好奇心をおぼえる対象を次々に変えていけば、無限に満足を感じられるということ。

(7)　次の文は、文章中のどの段落について述べたものか。最も適当なものを2～5段落のうちから一つ選び、その**段落番号**を書け。

> それまでの内容とは異なる話題を提示し、それに対する答えも説明している。

語句・文法・文脈把握・内容理解

2

次の文章を読み、あとの(1)～(8)の問いに答えよ。

「家を一軒、新築すれば一か月は寝込む」
と、よく母は言っていた。その頃は聞き流していたけれども、いざ自分が責任を持ってそれをすることになると、今更のように母の言葉を思う。覚悟はきめて取りかかったものの、まず経済的な重荷がずっしりと両肩にのしかかってきた。人間一人がつい古代の住居などがうらやましくなる。

設計の段階から、何十辺、業者との打ち合わせをしたことか。これで半年間を費やしたことになる。一つの窓も、一枚の戸も、すべて、その材質、かたち、色、ハンドルの金具に至るまで細かい取りきめである。

「私の部屋と主人の部屋とを[a]中心に考えてください。あとはすべて付属物なのですから」

この言葉に業者は私の顔を見た。すでにこの世にいない夫のことである。

しかし、いつ帰って来ても困らないようにと、それは私の祈りにも似ていた。かぎりある土地で、きりつめた経済の中で設計をするのだから、必要のないであろう部屋を取るのは[b]無理であったかもしれない。〈ア〉

「そうですか」

あえて誰も反対しなかった。私の言葉におそれをなしたのか、あるいは同情をしたのか。とにかく賛成をしてくれた。その上に、庭先の柿の木が問題になった。設計通りに工事を進めてゆくと、当然、[c]邪魔になる場所にそれはあった。〈イ〉

夫が植えて三十年にはなるだろうか。春にはもえ黄色のやわらかな葉をひろげ、夏にはみどり濃い日かげを作ってくれた。秋が来れば[d]透明な空気の中に、赤い実が重なってみのった。それは幼かった子供達のおやつになり、庭先へ来る小鳥達の餌になった。落葉の散る頃、かき集めた中で焼芋を作った。いわば家族と一緒に生きて来て、いまはすでに枝は二階の窓に届いている。

その木が、今、建築の邪魔になった。〈ウ〉

「絶対に切らないでくださいね」

庭のほぼ中央にそびえている関係で、又無理な言葉になった。相談の日がつづいた。業者は困り果てた。[B]その様子はよくわかっていたけれども、私は必死だった。その木を切ることは、夫との四十年の生活を切り捨てるようなものだとさえ思っていた。

設計図を何回、引きなおしたことか。やがてコの字型の家を建てることになった。つまり柿の木を建物で囲むかたちである。

「妙な間取りになりますよ」〈エ〉

しかし、問題は次々に出て来た。壁の色を、風呂場の材質を、洗面所は、玄関はと。電灯に至るまでカタログを前に業者との打ち合わせである。それ等の展示場見学にまで誘われた。時間に追いまわされている日々の中で、言わば雑用は、ひどく邪魔に思われた。業者はむしろ、その方に力を入れるらしく、執拗に誘う。

「お任せしますよ」

任せられても困るのだという。出来上がった時に文句を言われたら責任のやり場がなくなるからであろう。

しかし、私は、業者の主張とは別に、写真をとり出した。その技術に全く自信はないけれども、夫の部屋を作るためには、業者に口で説明するよりも、写真を見せた方が、いいと考えたからである。決して贅沢な作りではないけれども、夫は部屋をかぎりなく愛していた。壁には、山道具がずらりと並んでぶら下がっている。ピッケルに、ザイルに、ハーケンに、そして登山服まで。

「ほこりになりますよ」

と、[C]戸棚にしまい込むことをすすめるのだが、その都度、夫は激しく抵抗した。

「お前などが手をふれたら不潔だ」

と。その言葉通り、山の支度はすべて、自分で整理していた。その中に、なぜかただ一つ、セガンチーノ[注1]の農婦の絵が並んでいた。しかも夫の座っている場所から、正面に見える場所に。うす紫の服をまとった農婦が、柵に寄りそっている絵である。遠くを眺めて物思いにふけっているその姿が好きだったのか、農村風景に心ひかれたのか、私は知らない。ただ私に手を触れさせなかっただけである。多分夫は仕事に疲れた時に一人、眺め入っていたのであろう。私はそれを大きくカメラに収めた。業者に見せるために。たとえ、私の住む部屋は、どのように変わっても、気にしない。私は、そこへ住みついてまた、歴史を作ることができるからである。[D]夫にはそれができない。そのためには、[E]細心の注文を業者に依頼しなければいけないのだと私は考えていた。

（藤原てい「家族」による）

（注1）セガンチーノ＝イタリア生まれの画家。スイスでアルプスを背景に自然と人間の調和した風景を描いた。

(1) 文章中の［A］に入ることばとして最も適当なものを次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 慈雨　**イ** 甘露　**ウ** 雨露　**エ** 露地

(2) 文章中の═══（a・b・c・d）のうち、品詞の**異なるもの**が一つある。その記号を書け。

(3) 文章中には、次の［　］内の段落が抜けている。この段落はどこのあとに入れるのが最も適当か。文章中の〈**ア**〉～〈**エ**〉のうちから一つ選び、その記号を書け。

それを承知の上での注文である。第三者がどのように眺めても、それにこだわるつもりは全くなかった。自分の住む家である。

(4) 文章中に[B]その様子はよくわかっていたけれども、私は必死だった とあるが、なぜ必死だったのか。その理由を説明した次の文の［　］に入ることばを、文章中から**二字**で抜き出して書け。

四十年にわたる家族との生活の［　］を大切にしたかったから。

(5) 文章中に[C]戸棚にしまい込むことをすすめるのだが、その都度、夫は激しく抵抗した とあるが、なぜ夫は激しく抵抗したのか。その理由として最も適当なものを次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 自分の部屋を山にみたてて、山の思い出に浸りたかったから。
イ 自分以外の者に勝手にふれられると、不潔になってしまうから。
ウ 自分で整理しないと気がすまないほど、部屋を愛していたから。
エ 山や絵に対する自分の思いが薄れてしまうように思えたから。

(6) 文章中に[D]夫にはそれができない とあるが、それはなぜか。その理由がわかる一文を文章中から探し、**はじめ**の**五字**を抜き出して書け。

(7) 文章中に[E]細心の注文を業者に依頼しなければいけない とあるが、「細心の注文」とはどのような内容か。「**夫**」「**同じ**」という言葉を用いて、**十五字以上**、**二十字以内**（句読点も字数に数える）で書け。

(8) この文章の内容として最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア　自分の周辺がしだいに変わっていく中で、ともすると忘れがちになる家族の思い出を大切に守ろうとする心が描かれている。

イ　新しく建てる家にまつわることを題材にとりながら、夫に対する優しい思いを細かな描写を交えて表現している。

ウ　新しいものへと変化していく時代の中で、古い時代に慣れ親しんだ生活の名残を守ることの大変さを表現している。

エ　家族との思い出や夫への思いを述べながら、家を建て替えるときにつきまとう困難さについてわかりやすく説明している。

古典　内容理解

3

次の文章を読み、あとの(1)～(5)の問いに答えよ。

平等院の僧正、諸国修行の時、摂津の国住吉のわたりにいたり給ひて、斎料のつきにければ、神主国基が家におはして、経をよみて立ち給ひたりけり。その声微妙にして、聞く人、たふとみあへりけり。国基、御斎料奉るとて、「いづかたへすぎさせ給ふ修行者ぞ。御経たふとく侍り。今夜ばかりはここにとどまり給へかし。御経の聴聞つかまつらん」といはせたりければ、とかくの返事をばのたまはず、うたをよみ給ひける、

世をすてて宿もさだめぬ身にしあればすみよしとてもとまるべきかは

かくいひて通り給ひぬ。

その後、天王寺の別当になりて、かの寺におはしましける時、国基参りて、天王寺と住吉との堺のあひだの事申し入れけるに、「しばし候へ」とて、あやしく御前へめされければ、かしこまりつつ参りたりけるに、僧正、明障子ひきあけさせ給ひて、「あのすみよしとてもとまるべきかはは、いかに」と仰せられたりけるに、国基あきれまどひて、申すべき事も申さで、取り袴してにげにけり。いと興あることなり。

（「古今著聞集」による）

（注1）斎料＝僧侶の食事のための費用。
（注2）微妙＝非常にすばらしいさま。たとえようもないほど美しいさま。
（注3）別当＝大きな寺の最高位にある僧のこと。
（注4）天王寺と住吉との堺のあひだの事＝天王寺と住吉大社の間での、領地の境界に関するもめごと。
（注5）明障子＝現在の障子と同じもの。
（注6）取り袴して＝すそを踏まないように、袴の腰の辺りの布を持ち上げて。

(1) 文章中の A のたまはず、D おはしましける、E 参りたりけるに の動作主の組み合わせとして最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア　A＝僧正、D＝僧正、　E＝国基
イ　A＝国基、D＝聞く人、E＝僧正
ウ　A＝国基、D＝国基、　E＝僧正
エ　A＝僧正、D＝聞く人、E＝国基

(2) 文章中に B すみよし とあるが、これには「住吉」という地名と、もう一つ別の意味がかけられている。その意味を自分で考えて**五字以内**で書け。

(3) 文章中に C とまるべきかは とあるが、このように詠んだのはなぜか。その理由として最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア　神主とは面識がないので、宿を借りるわけにはいかないから。
イ　神主が読むお経を聞き、自分ではかなわないと思ったから。
ウ　諸国をまわって歌を詠むための費用が不足しているから。
エ　諸国をまわって仏道修行をしている最中の身であるから。

(4) 文章中に F あのすみよしとてもとまるべきかはは、いかに とあるが、ここでの意味として最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア　私が詠んだあの歌はいかがだったでしょうか。
イ　私の歌のせいでもめごとがおきたのでしょうか。
ウ　斎料のお礼に歌を詠むべきだったでしょうか。
エ　歌にたくした私の思いは伝わったでしょうか。

(5) 文章中に G 申すべき事も申さで、取り袴してにげにけり とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア　天王寺の別当に、自分の正体を知られてしまうと、具合が悪かったから。
イ　天王寺の別当に、もめごとについて一方的に非難されて、腹が立ったから。
ウ　天王寺の別当が、自分が斎料を差し上げたあの修行僧だと知って、たいへん驚いたから。
エ　天王寺の別当が、領地の境界線を一方的に決めたことに納得できなかったから。